

# 大江山鬼退治

源 頼光——みなもとのよりみつ〔みなもとのらいこう〕。三十七歳。

渡辺 綱——わたなべのつな。三十八歳。

坂田金時——さかたのきんとき〔公時とも〕。三十六歳。

碓井貞光——うすいのさだみつ。三十七歳。

卜部季武——うらべのすえたけ。四十一歳。

藤原保昌——ふじわらのやすまさ。五十八歳。

酒吞童子——しゅてんどうじ。

## 一、恐ろしいうわさ

丹波（たんば）の国の大江山（おおえやま）は、今は京都府になっておりますが、丹波（たんば）と丹後（たんご）の国境に屹立（きつりつ）して、昔は鬼が住む恐ろしい山として、三歳の子供も知らない者はありませんでした。

ときは正歴（しょうれき）元年二月中頃のことでした。寒い北風がしきりと吹いて、葉をふるった路傍（ろぼう）の冬木立がヒューヒューと鳴っている夕暮れ方、丹波（たんば）の守護、多木源三郎景好（たぎげんざぶろうかげよし）の家来が、ひとり頭巾まぶかく、金棒をがしゃんがしゃんとつきつき、警護のため、巡邏（じゅんら）してくると、一人のぼろぼろの野良着を着た農夫が、破れ籠（かご）に薪（たきぎ）を入れたのを力なく背にして、しくしくと泣いているのでした。家来は不思議に思って、足をとどめ、

「これこれ、どうしたのだ。何が悲しくて、そんなに泣いている」

と、やさしくすかして、たずねますと、涙を古（ふる）手ぬぐいで、ふきふき、

「うちの小せがれが、どけえ行ったものか、いまだに帰ってめえりません。働き盛りのわしどもにゃ、一人息子でがす。あやつがいなくなっちゃ、生きてる甲斐（けえ）もございませえ」

と、いうので、なおさら、怪しいと思ったので、

「ふふん。そいつはまた、どうしたというのだ。親子げんかでもしてのことか。それとも、気でも狂ったというのか」

と、ききかえました。農夫は、

「どうして、とんでもねえ。親子仲よく、かせいでいた。けんかどころか、評判のうちのせがれは孝行者。箸より重てい物は、このおやじにゃ、持たせめえとしてくれやした」

お武家は、ますます、解し兼ねて、

「そいつは感心のことじゃ。それじゃ、一体、どうしたというのだ」

農夫は力なくなく、

「てっきり、大江山（おおえやま）の主（ぬし）にさらわれたんでやす。……  
ああ……あのうちのせがれも今頃は骨に……骨になって谷底に放り出されてい

ますべえ。骨……骨でもいいから、拾いに山奥へ入って見べえかとも思って、  
ここまで慕ってめえりやした……」

家来は目を白黒させて、ことの意外な話に驚いていましたが、農夫の心情に  
思いあたって、つくづくと、ふびんに思って、

「それはお気の毒なことだ。主（ぬし）というのはいったい何だ、大へびか、  
オオカミか、それともクマか、ヒヒ、猩々（しょうじょう）とでもいうのか」

農夫は頭（かぶり）を振って、

「いえいえ、神変自在（しんぺんじざい）の通力とかを得て、当国（とうごく）  
大江山（おおえやま）の千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）の岩窟（いわあな）に  
巣をくっていやして、ひょいとあらわれ、ひょいと姿をかくして、風のように  
人をさらい、電光のように四体をさくのでごあんす」

武士は、いよいよ、怪しく思って、

「なな、何と申す。そのような化体（けたい）のしれぬ者が、いつ頃から出没  
いたすというのだ」

「はい、だんだんと気づき出しやしたのは去年の暮れ頃からでげす。その前か  
ら、どうもおかしい、おかしいたあ、いっていやしたが、大江山（おおえやま）  
の酒吞童子（しゅてんどうじ）たあ、気がつきやせんでした」

武士は怒って、

「さては酒吞童子（しゅてんどうじ）と申す盗賊の何か。いたずらをなすと申すか。小面（こづら）につくきともがらめ。早速、退治いたしてくれよう」

と、金棒を突っ立てて力むと、農夫は、

「とんでもねえ。酒吞童子（しゅてんどうじ）につかまって帰ってきた試しはねえ。うっかり手だしをすれば、お武家様、お前様が退治られてしめえます。大江山（おおえやま）にゃ、酒吞童子（しゅてんどうじ）ばかりじゃあねえ、そいつが頭（かしら）に幾人となぐ眷族（けんぞく）がいやして、ほら窟（あな）の中にうじゃうじゃ、巣をくっついてやす」

と、いうので、

「それじゃ、なおさら、ほうって置くわけにいくまい」

こういって、武士は、別れて帰りました。そして、ことの始終を、守護守（しゅごのかみ）多木源三郎（たぎげんざぶろう）に話していると、そこへひょっこり、うろたえた口も、ろくろく、きけぬようになった、みすばらしい女が訪ねてまいりました。

「おお、こわい。ああ、恐ろしい。お武家様、お化けです。大入道（おおにゅうどう）だとおもったなあ、ほんまの人です。酒吞童子（しゅてんどうじ）です。今、そこまできた娘が二人さらわれ、姿が見えません。ああ、娘が……娘が、酒吞童子（しゅてんどうじ）に！」

と、狂せんばかりに泣き叫ぶのでした。多木源三郎（たぎげんざぶろう）は自分の役がら、ほうっておくわけにいきませんから、だんだんとさぐってみますと、越後（えちご）の国のさる山寺に怪僧があつて、ある心願を起こし、たちまち、鬼の形となって神変自由（しんぺんじざい）をおこなう術を得、これと同様の心願を起こして、ここかしこから眷族（けんぞく）が集まり、今は七、八名も、毛むくじゃらな鬼どもとともに住んでいるということがわかりました。それにしても、早速、正体を見届けてやろうと、すぐ案内をさせていこうとすると、どうしたはずみか、山道へかかると、はるか奥の深い林の茂みから、ひょっこら、てらてらした後頭を出したかと思うと、ぬっと立って、のそりのそりと奥の方へ入っていきます。見ると、身長は七尺にも余るようで、まるで大てんぐのようです。これを守っている眷族（けんぞく）どもも、世の常の人とは見えません。皆、恐ろしい姿をした大男ばかりです。

「これで鳥も通わぬような、ほら窟（あな）にかくれていては、いかに多勢でのりこんでも、てんで、よりつくことはできまい」

どうしたことかと思案しましたが、どうもよい考えが出ません。これこそは京都御所へ申し上げるよりほかはないと思ひまして、早馬で京都へ乗り入れました。

## 二、御所の評議

永延（えいえん）三年八月七日にはどういふものか、にわかには天が、かき曇って、つむじ風がひどく吹いて、京都では白川辺を初め、家がひっくりかえることは数えきれないほどでした。

「そら、とんだ」

「それ、まき上がった」

という具合に、街は上を下への騒ぎ、風はますます強くなって、ついには宝闕（ほうけつ）の宮殿や諸門が、ことごとく破壊せられないというところはなく、棟梁（むねはり）を吹き飛ばすことは木の葉の散るがごとくでありました。これを防ごうとして立ち回った者は、これにうたれて、

「俺は頭を打ち破れた」

「俺は腰骨を打ち損じた」

と、悲しい目を見る者が家々にあって、浅ましきかぎりでありました。そのうちでも、

「あそこの山門が倒れた」

「ここの社殿が破れた」

と、いうので、

「これこそは神、仏のお怒りである。殊（こと）に日本は神国であるから、こ

れは幣（へい）を奉り、神楽（かぐら）を奏して神慮をなだめ奉らねばならぬ」

と、いうので、大いに神楽（かぐら）を奏していました。すると、

「今度の災いは、竜や神のたたりではなく、西山に妖鬼があつて幻術をおこなう——すなわち、彼の所為（しよい）である。ついては源 頼光（みなもとのよりみつ）が鎮守府となつて任につくことになっているが、しばらくの間、さしとどめておけ。辺ぴなところに赴（おもむ）かば、妖鬼はいよいよ、ときを得て、必ず朝廷の災いとなるだろう」

という戦慄（せんりつ）するようなご神託です。そこで、早速、参内（さんだい）して、これを諸卿に話すと、さては奇妙なことである、と、いい合っていました。そこへ、摂政の藤原兼家（ふじわらのかねいえ）が出てきて、手を打って、いかにも不思議そうな顔をして、いうには、

「頼光奥州（よりみつ おうしゅう）への任のことは、すでに、われの胸中にあつた。しかし、まだ、舌頭には出ていなかった。右のご託とは、なんと、おそろしいことであろう。神託は、さらにうたがうところはない」

と、衆議は決して、頼光朝臣（よりみつあそん）の赴任のことは、やめることになりました。そこへ、都鄙（とひ）の男女がやたらに、行方知れずができて、啼哭（ていこく）する声が家々に満ちて、実にあわれなる有様となりました。そこへ、丹波（たんば）の国の守護、多木源三郎景好（たぎげんざぶ

ろうかげよし) から早馬をもって申してきたのであります。

「当国(とうごく) 大江山(おおえやま) に異類異形の逆徒が集まりまして、石を畳みて堀(ほり)といたし、岩に穴をあけて門となし、首領は千丈ヶ嶽(せんじょうがたけ) の岩窟(いわあな) にこもり、神変自在(しんぺんじざい)、さらに人間わざとは思えない。空をかけ、俄然(がぜん) として風を起こし、刀剣のやいばを借りずして人を裂き、六畜(ろくちく) をつかみ裂く、さまざまの幻術。人々、戦々恐々といたしております。どうぞ、一刻も早く、退治していただきとうござります」

と、申すのです。公卿(くげ) らは、

「まあ、待った」

と、いろいろに評議(へいぎ) いたされましたが、

「かかる例は前例がないわけでもない。昔、千方朝雄(ちかたともお) は、金鬼(きんき)、風鬼(ふうき)、水鬼(すいき)、隠形鬼(いんぎょうき) という四の鬼を討って通力を失わしめ、勢州鈴鹿(せいしゅうすずか) の鬼神も坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ) に滅ぼされたことがござる。これは天智桓武(てんち かんむ) の朝の例にならって器量ある武士を選んで誅戮(ちゅうりく) しかるべし」

と、いうことになり、



「当時、天下の武士中、化生（けしょう）退治すべき者はひとり頼光（よりみつ）ばかりである」

というので、とうとう、頼光（よりみつ）に、この大役が落ちかかりました。

### 三、頼光（よりみつ）の奇策

頼光（よりみつ）は宅へ帰りまして、一室に入って、じっと考えました。

「今度の丹後路（たんごじ）の化生（けしょう）退治は、うっかりとはやれない。ただの盗人とは、ことかわり、山の奥の岩屋の中に、もぐり込んでいるのである。それに神変自在（しんぺんじざい）の通力を得ているというのだから、なおさら、始末がわるい。どうして討ってやろうか」

と、いろいろ考えましたが、

「これは神力を仰ぐよりほか、いたし方はない」

と、それから拍手合掌して、

「南無八幡大菩薩（なむはちまんたいぼさつ）、どうぞこのたびの大役の化生（けしょう）退治を首尾よく仕遂げることができますように」

と、心を込めて祈りました。なお、春日（かすが）、石清水（いわしみず）、住吉（すみよし）には、それぞれ、保昌（やすさま）、貞光（さだみつ）、季武（すえたけ）を代参させ、渡辺 綱（わたなべのつな）には進発の用意をさせ

ました。

用意万端ととのって、千余騎の同勢を引きつれ、三月二十七日早朝、京都を進発いたしました。見送りの人々は両側に山のようにならんで、しっかりたのむよ、うまくやってきておくれ、と口々に叫びました。三十日の夜には丹波（たんば）の国、氷上郡（ひかみぐん）のとある山寺へと着きまして、そこに陣をとりました。頼光（よりみつ）は保昌（やすまさ）を召されて、

「保昌（やすまさ）、さて、いよいよ、大江山（おおえやま）へ近よってまいったが、いかがいたしたものであろうな。今度の賊は常の者とは、ことかわり、神変自在（しんぺんじざい）のくせ者どもじゃ」

と、申されると、保昌（やすまさ）は手をこまぬいて、

「仰せのとおりでございます」

と、かたくなって、小首を傾けていました。

「よって、尋常の寄せ方では、到底、退治はむずかしкаろう。もしか取り逃したら、最後、跡を隠して他邦に走るであろう」

「これには一つ、知略を巡らさねばならぬ」

「はい」

「はいではない。そちには何ぞ、よい知略は持っておらぬか」

「別にこれぞと申し上げるほどのよい策略もございませんが」

と、保昌（やすまさ）は、なお、かたくなる。

「保昌（やすまさ）は昔、素戔鳴尊（すさのおのみこと）が大蛇（おろち）を斬った話を知っておろうな」

「はい、あのときは八つのかめに酒をたたえまして、稲田姫（いなだひめ）を大蛇（おろち）のおる東の山の頂上に三重の棚を作って立たせました」

「そうじゃ。そしたら朝日の影で、かのかめの中に八人の美女がうつり、大蛇（おろち）はそれをまことの娘と思って、ただ一のみに飲みほして酔いたおれた。ところをずたずたに斬り倒したのだ」

保昌（やすまさ）は、

「それでは、殿には、やはり、その故知（こち）にならって酒でも？」

「うむ、毒酒をこしらえ、策をもって、のましめようと思うのだ」

「それは結構、酒吞童子（しゅてんどうじ）は酒が大好きだということですから」

と、手を打って喜びました。頼光（よりみつ）はニッコリとして、

「それには、こんなに大勢の兵士をつれては、ことが面倒じゃ」

保昌（やすまさ）は急に心配になって、

「そういたしますと殿にはお一人で？」

と、膝をのり出して、問います。頼光（よりみつ）は笑って、

「まあ、待った。一人だ、なぞと、誰が言った。その方も連れてゆく、綱（つな）もつれてゆく、碓井（うすい）も、ト部（うらべ）も」

保昌（やすまさ）は、うれしく、よろこんで、

「こんなにうれしいことはございません。すぐ、参ります」

と、いって、早跳び上がって、出発の支度をしようといたしました。頼光（よりみつ）は、

「まてまて、そんなにあわててはならぬ。まだ、酒も用意いたしてはないではないか。それに、この身なりで、うかうかに行けると思うか」

と、いわれて、保昌（やすまさ）は、はたと行き詰まりました。

「ほんに、このままでは」

と、いって頭をかいていますと、頼光（よりみつ）は、おだやかに、

「保昌（やすまさ）、主従六人、山伏の姿に身をやつすのじゃ。藤の衣に笈（おい）をかけ、頭巾眉半ばに責め、怪しの足袋、脚巾（はばき）に、金剛杖（こんごうづえ）をこうついて、知略の道具は笈（おい）に入れ、神変鬼酒（しんぺんきしゅ）の毒酒はおまえ、しっかりと背負いこんでくれ」

保昌（やすまさ）は、

「なるほど、なるほど、神策でございます」

と、早速、五人の従者を呼んで、意を含めて、用意にとりかかりました。

#### 四、山伏姿の主従

出発用意は十分に、ととのいました。そこで、頼光（よりみつ）は長男、下野（しもつけ）判官、源 頼国（みなもとのよりくに）殿をお呼びになりました。頼国（よりくに）は当年にとって二十歳、名将の嫡子とて、その骨柄あつぱれ、勇々しき若大将であり、将来の知謀の程も見えました。

「これ、頼国（よりくに）、今、父のことをよくきいてくれ。賊徒は皆、枝葉の敵であって、そのもとは千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）におるのじゃ。今、城を落とすのは容易であるが、一度、城が落ちたりときいたなら、首領、酒呑童子（しゅてんどうじ）一味は雲をかすみと後をくらますは必定。そこで、主従五、六人、安危を天運に任せ、はかりごとをもって忍び入り、急にこれを取りひしごうと考えておるのじゃ。ついては、これまで軍勢を率いてきて、今になって急にとどめたなら、敵にさとられてもならぬ。なんじは諸軍を率いて大江山（おおえやま）をとりまき、一人も漏らさぬように計ってくれ。しかと頼んだぞ」

と、軍（いくさ）のことは、ことごとく言い含めて、その夜の明け方に諸軍をととのえて、大江山（おおえやま）へと向かわせられました。頼国（よりくに）は翌、早旦（そうたん）から、大江山（おおえやま）を取り巻いて、関（とぎ）の音、上げますと、元来、こもっている敵は、強盛猛勇の者どもではあ

りまするが、尋常のごとく、軍（いくさ）の作法なぞ、心得ている者ではございませんから、打って出て戦おうとせず、ただ城中にこもって、力に任せて大石や大木を幾らともなく投げかけて、打ちひしごうとしているばかりです。一方、寄せ手の方では心は矢竹に走りまするが、城が山の頂（いただき）、味方は溪谷（たに）の底といったようなわけで、ただ歯をくいしばって所々（しょしょ）にたむろして、はるかに城を見上げて守っているばかりでした。

頼国（よりくに）出陣の日の昼頃、すこし過ぐるとき、そっと主従は無根坂（むこんざか）を立て、千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）へと向かいました。そのときまで、ぜひ、お供をさせてくれと慕ってくる兵（つわもの）が三十余人もございましたが、

「一人でも多くては、かえって、手段の妨げとなるから、志（こころざし）の程は天地に銘じて感謝にたえないが、帰ってくれ」

と、無理やりに、ここの野端（のはずれ）、かしこの山中で、五人、三人ずつ、おいとまをたまいました。各（かく）どこまでともつきまとい進まんものと強く望んでいたものでありますが、力及ばず、すごすごと、もと来たし道をひきかえして、大江山（おおえやま）へと向かいました。その日は暮れて、福智というところへ着きますと、とある山陰に主（ぬし）もない、草の庵（いおり）がありました。

「これは究竟（くっきょう）のところだ。いざ、こよいは、ここに一夜の宿をとることにいたそう」

と、いうことになり、一夜明ければ、用意してきた調度を取り出し、姿をかえて出立しました。頼光（よりみつ）は、頭巾眉半ばに責め、足袋、脚巾（はばき）に身をかため、力杖（ちからづえ）ついて、さて、いうには、

「さ、これでよい。今からは都方（みやこがた）の山伏が伯耆（ほうき）の大山に詣（もう）ずる体（てい）に見せかけるのじゃ。ついては、この中で、年上の者が先達（せんだつ）になってもらわにやらぬ」

と、いって、お笑いになると、一同は、

「なるほど、それは、ハ……」

と、笑いこけました。頼光（よりみつ）は今年、三十七になりたまい、綱（つな）は三十八、季武（すえたけ）は四十一、公時（きんとき）は三十六、貞光（さだみつ）は三十七になっっていますので、各（かく）その年を言い合っていました。保昌（やすまさ）は今年、五十八になっていましたが、わざと幾つともいわず、黙然として、ただ人々の年をきいていました。頼光（よりみつ）は笑いながら、

「保昌（やすまさ）、そちは？」

と、申されると、

「皆、われがちに申されますが、論ずるまでもなく。今日の先達（せんだつ）は、それがし」

と、いうと、季武（すえたけ）は、

「それでは、それがしは、先達（せんだつ）にはなれなかったか。一代の不覚」

と、いえば、一同、手をうって笑い、保昌（やすまさ）は、

「悲しいことに、鬢（びん）の髪が斑白（はんぱく）にでもなっていないならば、三十とでもいうて、人に先達（せんだつ）をさせ、また習わぬ山伏修行、捨身拝擲（しゃしんはいず）の行体（ぎょうたい）でも、お受けいたしまするが」

と、いいました。頼光（よりみつ）は、

「朝家（ちょうけ）のためと思えばこそ、このようなおこがましき姿にもなったわけじゃ」

と、いわれると、保昌（やすまさ）は、自分の身なりをふりかえり、

「都で人に見られる姿かいな。さ、おのおの方、これから高名（こうみょう）分捕りも先達（せんだつ）をさしおいて粗忽（そこつ）の挙動があってはなりませぬ。先達（せんだつ）のおきてはご存じでしょうな」

と、戯れにいえば、おのおの、ハリハリと、ときならぬ笑いの花を咲かせつつ、六人の山伏は出発しました。



## 五、行き暮れし叢祠（ほこら）

にわかづくりの山伏は笑談に旅行の憂いを慰めながら、だんだんと進んで、丹後（たんご）の国のとある寂しい山中の叢祠（ほこら）に行き暮れました。流るる溪流の音も、ほそぼそと、茂る黒い森陰には魔の鳥でも巢をくっついていそうなところでした。

「ここはどこだろう」

と、問うてみたいと思っていたところへ、薄暗闇の奥から一人の法師が出てきました。ポツツリと豆のような光が、ちらちらとするかを見たのは、小がめを携えていたのです。ちょうど、社頭にご灯進（ごとうしん）を進（まい）らせようとして、のこのこと出てきたのでした。季武（すえたけ）は、ちょうどよいところへ出会わした、と思って、近よって、

「やや、ご坊（ごぼう）。これは、いかなる神を祭った御社（みやしろ）じゃ」

と、問いますれば、法師は、何の会釈もなく、つけんどんに、

「これは当国（とうごく）一宮（いちのみや）籠宮権現（このみやごんげん）

とて、住吉（すみよし）の神と、ご同体でございまする」

と、ただ一口いって、土器を取り出し、炬（かがり）を照らして、また、もとの道へ帰ろうとします。そこで、頼光（よりみつ）は進み出て、

「あいや、しばらくお待ちください。お頼み申したきことがござる」

と、法師の袖を引きて申せば、

「いざいざ、お放してください。去る頃から、この山の奥には、鬼神とかが住んでいて、夜にさえなれば、山々里々に出て、人を害し、獣をとる、とのうわさ。それじゃによって、申（さる）の刻（こく）下がりになりては、きこりも牧童も家路へかえって、門戸を閉じています。それがしも、当社のともしびを、いつも申（さる）の刻（こく）以前に進（まい）らせましたが、今日は用事があって、いつもよりも遅くなりました。どりゃどりゃ、一足も早く帰って生きのびたい」

と、袖を振り放って、逃げるように行きたがっています。頼光（よりみつ）は、逃げられては大変と、

「われわれは、ご覧ぜられるよう、回国行脚（かいこくあんぎゃ）の山伏でござる。どこの社々（しゃしゃ）にても奉幣（ほうへい）して通るので。当社へも一紙の願書を進（まい）らせたく存ずる次第、今しばらく待って、宝殿に奉納してくだされば、喜びはこの上はござりませぬ」

と、こしらえごとを申すと、寄進ときいた下臈（げろう）法師は、

「いやいや、左様な奇特なお志（こころざし）でありましたか、これはめっそうなごあいさつをいたして相すみ申しません。さ、ともかくも、こちらへ」

と、打って変わったあいさつぶり、頼光（よりみつ）は、傍らに、うずくま

っていました綱（つな）に、

「それぞれ」

と、申されましたので、綱（つな）は、

「はは」

と、直ちに矢立て、豊紙（たとうがみ）を取り出して、

帰命頂礼当社権現者住吉大明神之変座して国家鎮護の宝社、怨敵降伏三霊神  
なりうんぬん

と書き、最後には六人の名をそれぞれ書き記しました。そこで件（くだん）  
の法師は、この願書をささげ、いかにも、いかめしげに拍掌（はくしょう）い  
たし、やがて、宝殿にささげ奉りました。そこで、約束のごとく、引出物（ひ  
きでもの）たくさんに、たまいましたので、法師は喜ぶこと斜めならず、さま  
ざまの供応（きょうおう）ごとを言い散らし、色代（しきだい）いたして帰り  
ました。かくて、人々は叢祠（ほこら）の露に袖を片敷いて、夜通し、祈り明  
かしました。

## 六、山中（さんちゅう）山男（やまおとこ）に会う

夜はもう、明けたから、頼光（よりみつ）、保昌（やすまさ）、四天王ともに、喜びの奉幣（ほうへい）をして神前は出ましたが、さて、行く手の路（みち）は一向に知りません。きこりも山賊も行き会いませんから、尋ね人とてもありません。ただ細谷川の岩間をもる水が、チョロチョロと心をひやすように耳にこたえるばかり、あるいは岩の陰路（かげみち）をふみならし、あるいは妻乞鹿（つまこいしか）の通路の木の根に取りつき、奥へ奥へと深く入ってまいりましたが、ただ山深くなるばかりで、行きかう人もなければ、訪（おと）う人もありません。

「どうしたものか、こまったわい」

と、思い煩（わずら）っておりました。ところへ、どうしたことか、怪奇なる男が慌ただしげに、さも、路（みち）を急いでいるらしく、一行の前を横ぎって通りました。綱（つな）は、いち早く近よって、

「あいや、お待ちください。ちょっと、お尋ね申したきことがござります。われわれは伯耆（ほうき）の大山へ詣（まい）る者でございしますが、この山に踏み迷って、進退を失って、こまりぬいでござる次第、どうか、道を教えてはくさいませんぬか」

と、さも、なれなれしく、頼み込みました。すると、男は振り向き、

「なに？ 回国修業（かいこくしゅぎょう）の客僧たちとな？ そいつは、痛  
わし御事（おんこと）だわい。道をさえ、急いでいなければ、ご案内いたして  
も進ぜるが、あいにく、たのまれた人の方に、ことの急を知らせにやらぬ使  
いだから、どうもかない申しませんわい」

と、いいすてて、かけてゆくのを、綱（つな）は強（し）いて呼び止め、  
「まあまあ、お待ちください。そんな薄情なことを仰せられるな。あなたも、  
ご存じでござりましょう。世に知らぬ途（みち）に迷う程、憂きことはござり  
ませぬ」

「おつれくださりさえいたすなら、随分、足を限りに歩きましょう。お妨げは、  
いたしませぬ。このように、人跡の絶えたところで出合い進（まいら）するこ  
とも、何かの因縁。お導きください。お供いたします」

と、六人は、おのおの、口々に申されましたので、男もそれでもと、ことわ  
るわけにもまいらず、

「さてさて、ききわけない客僧たちの物の言いようじゃわい。それなら、歩い  
ておいでなさい。あとの方にすてられても、われを恨んでくださるなよ。道を  
ば急いでおりますから、一足も待ち進（まい）らすることはできませんぞ」

と、いって、先に立って、歩いていきます。人々はよろこんで、  
「なんで、恨みましょうぞ。どんなにでも、お急ぎめなされよ。後より必ず、

ついてまいりましょう」

と、いって、遅れじと、ついていく。保昌（やすまさ）は、  
「どういうわけで、かくはお急ぎ召さる。いづくから、いず地へ、お渡りなさ  
る」

と、申しますと、男は、  
「この奥に千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）という岩窟（いわあな）がございま  
す。そこへ、参るのでござる」

と、いうので、六人は目と目を見合わせ、  
「さては神の引き合わせじゃ。おのおの、ご油断めさるな」  
と、心中に祈誓（きせい）をこらしました。頼光（よりみつ）は何事なげに、  
「さきほど申さるるには、何か、ことの急を告ぐる由（よし）、承りましたが、  
何事であるな」

と、問われますと、男は人々の顔を、じろじろと見ていたが、  
「心得ぬことをきくものかな」  
とや思ったが、答えません。そこで、保昌（やすまさ）は、  
「こんな山路の旅に物語りもしないで行くのもつらいことじゃ。そんなにお隠  
しなさらないでもよかろう。われわれは回国行脚（かいこくあんぎゃ）して勤  
修（ごんしゅ）を宗（むね）とする身であるから、たとえ、どんな秘密であろ

うが聞いたからといって人に漏らすべきことではござらぬ。何が苦しいことがござろう。お語りください。旅行の憂さを忘れ申そう」

と、すかして、いったので、男は、

「いかにも、方々（かたがた）は心おきのする人でもござるまいによって、それではお話し申そう。必ず、他言してくださるな。それがしは、丹波（たんば）の国、大江山（おおえやま）鬼が城（じょう）にいる者であるが、この山の奥に、千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）という、けわしいところがござる。そこに、かの城の酒吞童子（しゅてんどうじ）と申す人がござる。そこへ罷（まか）るのである」

と、聞いて、人々は、興がさめたような顔して、

「恐ろしいことをおっしゃる人でござす。かの童子とかやらんは、大江山（おおえやま）に住んで、人民禽獣（じんみん きんじゅう）を食として、通力自在、実に恐ろしい鬼だと聞いています。そんなところにおいでなさるとは心得ぬこと。物好きにも命を捨てなさるご所存か。ただしは、あなたも同じく、通力を得た神変（しんぺん）の人ですか」

と、舌を振るって、申しました。

## 七、酒吞童子（しゅてんどうじ）の生い立ち

山男は、だんだんと、うまい具合に問い詰められて、今は、いい逃れるにも逃れなくなりました。そして、

「童子は世にもきこえた一代の鬼神でござるが、それがしのごときは、ほんの小僧（こわっぱ）、どうして、どうして、通力を得て、神変（しんぺん）の早業（はやわざ）なぞかできよう。童子もはじめの程は大江山（おおえやま）に住まれたが、都が近いので、さすがに王威を恐れ、かつはまた、愛宕山（あたごやま）の大てんぐのために邪魔されて、心にまかせぬことが多いので、さき頃から、ひそかに、千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）に引きこもり中です」

と、いう。人々は、おもしろくなってきた、と心に思いましたが、そしらぬ顔して、

「そいつは気の毒な。一ついって、慰めておあげ申そうか」

と、戯れにいうと、男は、

「いやいや、とんでもござらぬ。引きこもり中とはいいいながら、恐ろしい気象や、たけだけしいおこないは、ちょっととも変わらぬ。大江山（おおえやま）には、茨城（いばらき）という猛者に、数百人の悪党を添え、討つてが下（くだ）らば、かの城でくいとめようとの腹、当時、天下に音の響いた武将、源朝臣頼光（みなもとのあそんよりみつ）さえ、討手（とうて）の大將として、下



（くだ）らしたが、にわかに心地が悪くなったといって、向かってこない。

これは申すまでもなく、童子の威に恐れをなしての逃げ口上」

と、いう。頼光（よりみつ）は、心の中で笑いをこらえ、

「さては源氏（みなもと）の大將も逃げを打ったというか、ハリハリ」

と、いう。男は得意に、

「逃げるも逃げたり。ご自身は途中から多田へ帰り、その子、判官、頼国（よりくに）とやらが、大勢を引き俱（ぐ）して、おとといから寄せているが、城は天険によって、びくともしない。寄せ手は手がだしようがなく、ここ当分、退屈の体（てい）。いやはや、早くこの体（てい）たらくを、ご注進いたそうとして、ただ今、こうして、急いでいるのでごわす」

と、とうとう、本音を吹いてしまいました。頼光（よりみつ）は打ちうなずいて、いかにも、うまい手引き、ここをのがさず、童子の素性をきいておき、いざというときの参考にしようと思い、

「その童子と申すは、いかなる人のばけたのであります。そのような不思議な神変（しんぺん）を施したまうとは？」

と、申しますと、男は、

「それは申しましょう。それは越後国（えちごのくに）なにがしの妻、はらんでいること十六ヶ月、産けがついて苦しむこと、並大抵でなく、もだえにもだ

え、もだえぬいて、とうとう、母親は死んでしまいやした。その後、自分で、はい出て、誕生の日から歩み、物を言うところは四、五歳ばかりの稚児のごとくでござったそう」

頼光（よりみつ）は、

「さてさて、珍しい話じゃ」

と、いう。男は、

「そんなわけで、諸人（もろびと）は皆、怪しみ、恐れない者はない。しかし、父上は、さすがに父子（おやこ）の恩愛の情があるところから、五、六歳になるまで育み、そだてておきやした。ところが、その戯れ遊ぶことまでが世の常の者と、ことかわり、人間のしわざとは思われないことばかりやっているのです。かの父も末恐ろしくなり、とうとう、奥山につれていき、まっくらの谷底へとすててしまいやした」

人々は、

「やれやれ、思いきった、荒っぽい仕打ちだ」

と、相づちをうつ。男は、つづけて、

「ところが、キツネにもばかされず、オオカミにも食われず、木の実を食い、谷の水を飲んで成長いたし、身の丈は八尺で、力はあるくまでもたくましく、そのうえ、飛法が成就して、あるいは陸上で人を遊（ゆう）せしめ、空中に身を

ひるがえす術を得、神変自在（しんぺんじざい）の早業（はやわざ）、それをききしたが、い、同軌（どうき）相（あい）求めるの類、類に従って、なびき集まる者が、どれもこれも異様の形相」

頼光（よりみつ）は、童子の生来が、だんだんとわかってきたので、心中にこれこそ、神のおみちびきとばかりに感謝しつつ、

「いかにも希代の代物じゃな」

と、いう。男は、なお、

「そりゃ、童子のように通力はないが、怪力強盛なることは実に天下無双であって、人間の程とも覚えな。ことに童子ときたら、酒を好むこと法外で、一度に飲むこと、酒だるにみたなければ、酔いません。酔えば、ひっくりかえって高いびき、全く通を失って、正体は、ごわんせん。それで、酒呑童子（しゅてんどうじ）と申します」

と、いう。頼光（よりみつ）は、さては自分のはかりごとと思うつぽに、はまっている。心の中に、うちよろこびました。保昌（やすまさ）は、

「さては、聞きしより、恐ろしいことござる。それにしても、われわれがこうして、回国修業（かいこくしゅぎょう）いたすも、役 小角（えんのしょうかく）の教えを受け、孔雀明王（くじゃくみょうおう）の法を修して、かなわざるまでも、飛行通力を得ようといたしているのでござれば、一つ世にも恐ろ

しい大童子にご紹介願って、目前に神変不測（しんぺんふそく）の妙術を見、  
恐怖異相の形態を見せていただくなら、山伏修業の便ともなる次第。一つ、あ  
なたにお願いでござるが、案内をしていただきたい」

と、申しますと、男は打ち笑って、

「ばかなことを申さるるな。いかに望みにことかえて、大童子に紹介をしてく  
れとな」

と、うけ合いそうにもありません。保昌（やすまさ）は、

「かく回国修業（かいこくしゅぎょう）をいたすのも、恐ろしいところに参っ  
て、身を凝らさんがための一存、大峰葛城（たいほう かつらぎ）の頂上に上が  
ったり、那智三重の滝にこもりまして、種々難行の功を積んでおりますは」

と、いうと、男は首を打ちふって、

「いやいや、いかに難行苦行も命あってこそ修せられましようが、かの嶽（た  
け）に入りますれば、行くとすぐ、命をとられることは、きまりきったこと、  
伯耆（ほうき）への道は、それがし、教え進ぜますれば、まずまず、大山に詣  
（もう）でなさい。その方が、ようがす」

と、いって、いっかな、聞き入れそうもありません。綱（つな）は言葉も終  
わらないうちにせき込んで、

「それは山伏法師の情を知らぬと申すもの。たとい、われわれ勤行（ごんぎょ

う) 未練にして童子のために失われれば、それこそ、捨て身の行体(ぎょうたい)なれば、不捨身命(ふしゃしんめい)の仏説に任せ、法のために何とて命を惜しみまするぞ。ぜひ、ともなっていてください。おたのみ申す」

と、手を合わさんばかりにいうので、男は困りぬき、  
「いやはや、わけのわからない山伏法師方。そんな手引きは、きっぱり、お断り申す。さて、ちょっと、子細があるから、これにて、お別れ申す」

と、いうが早いか、けわしい断崖を伝うて、雲をかすみと、その姿は木の間陰にかくれてしまいました。

## 八、山中の美女

一行のものは、あっけにとられ、顔と顔を見合わせ、さて、困ったことに相成(あいな)った。せつかく、究竟(くっきょう)の案内人を得たと喜んでいたのも、つかの間、かんじんのときに逃げられてしまったは一代の不覚、どうしたものかと打ち案じていました。頼光(よりみつ)は、  
「今は、せんないことじゃ。ただ、この一筋道を登ってまいることにいたそう。また、どのような者に会うもしれぬ」

と、いわれ、ここにまた、寂しい道をわけ入ることになりました。折しも四月の初めのことなれば、よもやまに残った薄霞(うすがすみ)は、ねむるがご

とく、都の春は過ぎたけれども、雪霜（ゆきしも）はげしい山国であるから、深山（みやま）がくれの遅桜（おそざくら）は今を盛りと見えます。それに、奥の方より流れ出た細谷川の水の音さえ、きこえてきます。

「よい眺めじゃ。何という景じゃ」

と、今は、よもやまの景色に酔うようにみとれて、やってまいりますと、谷川のほとりに一人の美しい女が、何やら、洗濯をしています。近づいてみますと、色白く、鼻筋通り、世にも気高い姫であります。しかし、頬の辺は憂き、苦勞の色がほの見えて、洗う手さきもいたいたしく、一目見ても涙が催す、いとしい姿です。一行は思わず、立ちどまって、

「この山奥に、この美人」

と、あっけにとられていました。保昌（やすまさ）は近づいて、  
「そこもとに、ちょっと、お尋ね申したいことがござる。われらは、ご覽のとおり、回国修業（かいこくしゅぎょう）をいたす山伏である。これより、伯耆（ほうき）の大山へ詣（もう）ずる所存で分け入ってまいったのでござるが、一つそれへ出る道のしるべをしてたまわれまいか」

と、申しますと、女は静かに打ちまもって、

「何と仰せらるる。回国修業（かいこくしゅぎょう）の客僧とな。これは、とんでもないところへ、お迷い込みあった。ここは、そのようなところへ通る道

ではござりませぬ。一刻も早う、もところれた道へと、とって帰らっしゃれ。

いつ奥から悪者が出てくるかもしれませぬ」

と、さも、気の毒そうに、せきたてて、いうのです。その顔には、さも、哀れみの情が、あらわれています。保昌（やすまさ）は、

「はて、合点のゆかぬ、お言葉。こうした、山の奥に、そなたのような、たわや女さえ住むに、どうして、また、われわれの来てはならぬところと申さるるな」

と、重ねて問いますと、女は、

「いかにご存じないとはいえ、この奥には世にも恐ろしい鬼どものすむ千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）。わたしなぞも、もとは三人のきょうだいして都に楽しく暮らしていましたが、先月の十五日、ふと、夜になって帰る途中、三人ともこの山奥へさらってこられ、やれ、酒をつげの、肴（さかな）を運べ、舞を舞え、唄（うた）もうたえと、夜は、よっぴてさいなみ、苦しめ、朝はまた朝で、掃除、洗濯、炊（かし）ぎごと、そのうえ、姉はおととい、次の姉は昨日、とうとう殺されて食べられ、今日はわたしではございますまいかと存じています。この世の地獄とは、このようなところ」

頼光（よりみつ）は、これまで、黙って聞いておられたが、

「さては、につくき！ 鬼どもかな。その舌、その首は、こよいをかぎり、こ

ちらがもらった！」

と、思わず、申されると、女は、

「いえいえ、とんでもござりませぬ。人とみれば、誰彼の容赦もなく、打ちころして肉を食らい、血をすすってしまふ、おそろしい鬼。ささ、早くここをお引き返しあそばせ。このわたしの見張りの鬼が、もう出てまいるかもしれませぬ」

と、心をこめて、早く帰るようにすすめます。

保昌（やすまさ）は、

「いやいや、そのような女の方を一人のこして、どうしてかえらりよう。帰るなら、ご一緒にお伴い申す。それにしても、鬼どもに断りなしとは回国修業（かいこくしゅぎよう）の義にも、かないませぬ。さあさあ、まげてその千丈ヶ嶽（せんじょうがたけ）へ、ご案内をしてください」

と、ねがう。女は、今はあまりに無分別な申し条に、こうじ果て、

「はてさて、いかに捨て身勤行（ごんぎよう）のご法師様とはいえ、何の因果で、このような虎穴よりも恐ろしい童子の住んでいる岩窟（いわあな）へは、お迷い込みなさりました。酒吞童子（しゅてんどうじ）の好物は何よりかより、お酒ばかり。そのお酒は、もしか、ご用意がございまするか」

頼光（よりみつ）は、



「酒か？ 酒は、この笈（おい）の中に、いっぱい用意いたしてある。見れば、深山（みやま）がくれの遅桜（おそざくら）が今をさかりと咲いているので、一献、途中で傾けようかと思うていたところじゃ」

保昌（やすまさ）は、

「それでは、これより、その酒吞童子（しゅてんどうじ）とやらと宴（えん）を傾け、この峰から谷々、谷々から峰々に渡る。あちらに、ぼつん、こちらへ、ふんわり、咲く山桜を眺めて、くむことにいたしましょう。さ、案内を」

と、せきたてられ、女は、やむなく、洗いさしの布（きれ）を手にして、先へ立って歩き出しました。いたいたしくも、素足で、青コケむした石ころ、岩角を踏んで、いくども倒れそうになって進むのです。

## 九、骸骨（がいこつ）の山

先達（せんだつ）保昌（やすまさ）を頭（かしら）に、五人の面々は、この美しい山女の後ろについて、歩いて出かけました。岩に滑って、つまずきそうになったり、樹（き）の根に足をひっかけて倒れそうになったりして、今は道もないところを女のゆくのをたよりについていきますと、行くべき峰を見上げると、切りたったような、けわしい岸壁が峨々（がが）として、そばたっています。まるで、びょうぶを立てたようでございます。松の雫（しずく）、コケの

露深く、踏む人もありませんから、つるつるしています。一行は、うっかり、しゃべったりなんぞしていようものなら、踏みはずして、千丈の谷底へ落ちてしまいます。総身に気を込め、息を飲んで、あるいは葛（かずら）の根に取りついて片足を運び、あるいは松の枝を頼りとして岩角に足を下ろしたりして、身も縮むような岸壁の上へ着きました。見上げますと、まだ絶頂には、なかなかあります。

「空とぶ鳥も一羽では登れやせぬわ」

と、綱（つな）がいうと、頼光（よりみつ）は、

「さすがは酒吞（しゅてん）じゃ」

と、鬼ながら感心して、こう嘆じていました。そこで、先に立つ乙女の姿のいたいたしさには涙がにじみ出ない者はありません。幾度か、その足を踏みはずしそうでした。そのたびに保昌（やすまさ）や頼光（よりみつ）は支えるようにして、たすけおこしてやりました。

「こんなところも鬼は野原のように走りまする」

と、女は一口いいました。頼光（よりみつ）は、

「あなたの歩きつきは危なくて、とても後から見てられません。それでもよく登りおりなさいました。いくらか通力でも得ていますか」

と、あまりはらはらするので、一足休みながら声をかけますと、乙女は、静

かにふりかえり、玉なす汗をしぼりながら呼吸をはずませて、

「いつも鬼どもに背負われまして」

と、いいました。一行は、しめて、

「げにも」

と、合点し、

「それでは、綱（つな）がお背負いいたそう。さ、ご遠慮なく、背におって道  
しるべしてください」

と、彼は乙女の手をとろうとしますと、乙女は、

「いえいえ、もったいないこと。清浄な法師様に、鬼のすみかのはした女が、  
指でもおさわり申すことができますようぞ」

と、今は、けなげにも、一人で案内の大役を果たそうとして、かたく決して  
いる様子です。千辛万苦（せんしんばんく）とは、このことかと思われるよう  
な思いで、ようよう、とにもかくにも絶頂に来ました。季武（すえたけ）は、  
きつとなって、

「あれあれ、あそこに見ゆるは何じゃ、あの大穴は！」

と、声高によびました。乙女は、

「あれが石門なのです」

と、いう。一行は驚いた。

「あのようなところへ、あの大門を、また、どうして、こしらえたことだ」

「上下左右とも自然の岩をきりうがってあるわ」

と、いいながらまいりますと、今度は闇のように暗く、鼻をつままれてもわからないようです。冷やっこい風が、ずっと吹いてきて、身もちぢみ上がるようです。

「おのおの、きをつけたまえ。滑りたまうな」

と、さきに立つ保昌（やすまさ）は、いいました。前途は、まっくらで、鳥の声一つ、きこえません。伽羅（きゃら）国へ赴く暗穴道の分かれ道も、こうではあるまいかと思われました。こんなところをゆくこと、ものの十五、六町も参ったかと思うころ、穴から出て再び天の光を仰ぐことができました。のぞくと、これまた、鳥でもなければ、渡れそうもない断崖をひと越えしたところのかなたに第二の大石門が見ます。

尋常の者では、ここへきただけで気を失って、この絶壁から転げ落ちて、粉みじんになってしまうのです。門の柱も敷居も皆、石を彫って造ってあります。これは常にしめてあって、そばに小さい穴が設けてあります。乙女はその中へ姿を入れました。人々も同じように、この穴から入りますと、たちまち、暖かな気が身にしみるかと思うと、なまぐさい風が吹いてきました。

「はては？ 人肉？」

と、六人は、ぞっと身の毛が立ち、

「何たる浅ましき」

と、今は、にわかに何とも名状のしがたい、なやましい、やるせない、悲愴（ひそう）な感じと、哀愁の情緒とが胸におし迫ってまいりました。頼光（よりみつ）は、山のように、うずたかく積み上げられた骸骨（がいこつ）を一目見て、はらはらとおつる涙をおしぬぐい、しばしは言葉もなく、たたずんでいました。

乙女は、ちょっと、たちどまって、一行をかえりみ、さも、心配そうな目つきで、

「ようよう、参りました。しばらく、これにて、お待ちあそばして」

と、という言葉も、しどろもどろ、心の中では、この罪もない山法師方を、あたたら、こうして、鬼の餌食とする恐ろしさに身も世もないほど、心は痛んでいるのです。やがて、乙女の姿は中門へ消え、一行はこの残酷な骨の山を見、なまぐさい息にむせ入りながら、目と目と見合わせて、呼吸（いき）をのんで、注進をまっていました。胸には各（かく）、弓矢八幡の加護のほどを祈っていたのであります。

「南無八幡大菩薩（なむはちまんだいぼさつ）、どうか神威をもって大望の遂行、ご加護くださるよう」

## 一〇、酒呑童子（しゅてんどうじ）

乙女は石のとびらをやっと押しうごかして童子の部屋へ入りました。広さは、ざっと二十畳敷きばかり、北に面して大きな棚があります。そこには酒桶（さかだる）がいくつとなく積んであります。真っ赤な朱塗りの杯（さかずき）は童子の常に使用している日月の大杯（たいはい）であります。その右側の床の間式になっているところには大刀、薙刀（なぎなた）、頭巾、鎖経衣（くさりけいぎ）、鎧（よろい）など、ぞっとするような武器が、ごてごて積んであります。童子は乙女をニユッと見て、いやに大きな赤い唇を開いて、そのすごい口のわりに声は聞こえないほど、たたて笑いました。今、酒宴（さかもり）の最中であったのです。

「百合姫（ゆりひめ）、百合姫（ゆりひめ）、来たか」

と、いって、ずかずかと来て、むんずとその糸のような腕をつかんで、己の座のそばへつれて座らせました。乙女はもう、幾度もそうされていますから、びっくりもしません」

「はい」

と、かすかにいったばかりです。眷族（けんぞく）どもも、じろじろ見て、よい者が来たとでも思っているように、はしゃぎ出しました。童子は、

「それ飲め、飲めというに、なに飲めない、飲めなきゃ、さかさにしてふるぞ、

尻からつぐかな」

いやはや、おそろしいけんまくです。乙女は、ふるえる声を思いきって、はりあげて、

「あの門にご法師様がおいであそばしました。あの伯耆（ほうき）とかへ通る山伏とかが道に踏み迷って、どこぞ、ぬける道はないかとのこと。とても、そのような通路はございませぬから、もと来し道へとひきかえされるよう申しますと、そもじのような女子が住むところを見たい、たって案内するようにとの所望、断りきれませぬので、ご案内いたしました」

と、いうと、童子は、大きな目をむき出して、熱（あたたか）い酒息をフーと吹いて、

「そいつは、いい酒の肴（さかな）にありついた。一匹か二匹か」

と、さも、そっけない荒っぽい口のききかたです。

「六人でございます」

「そうか、それじゃ、二、三匹は夕飯の肴（さかな）に穴蔵へほうりこんでおけ。一番、味のよさそうなのから、料理してこい」

眷族（けんぞく）どもは立とうとしますと、乙女は制して、

「いいえ、わたしがご案内いたします。なんでも、たくさんにお土産をお持ちのようでございますから、生命（いのち）だけはお助けくださって、このまま、

おかえししてあげてくだされ」

と、熱心こめていうので、酒吞童子（しゅてんどうじ）は、真っ赤になって笑って、

「ばかなことを抜かすな。この俺は酒と女よりほかには、何にも、いらねえや。小法師づれの線香臭い経文や数珠なぞあ、真っ平だわハ……。なんでもかまわねえ、なんでもかまわねえ、なぐり殺して股（もも）でも、ひんむしってこい」

と、いう。乙女は心配しながら、元氣なく、やっと出てきました。

頼光（よりみつ）保昌（やすまさ）一行六人は、泣き出しそうな乙女に案内されて出てまいりますと、大床の間（おおとこのま）の前にどっかりと大あぐらをかいている。身の丈は立ち上がれば、まさに六尺にも余るであろう。腰のあたりは、がっしりとして、十かかえもありそうに見えます。頭は、お禿（かむろ）にして、振り分け髪です。その間から日月のごとく左右に眼（まなこ）が光り渡っています。面の色は朱をそそいだようであるのに眉は黒々として、ちょうど、漆で百度も塗ったようです。両腕は荒木の松でもまげたようで、ごつごつとして長い黒い毛がいっぱいに生えています。左には大杯（おおさかずき）を持ち、右には猿の片股（かたもも）をとって、今まで、しゃぶっていたらしい。いやはや、欲界六天の魔王。阿修羅王（あしゅらおう）の化けてきたのが、こんなものではあるまいかと思われるくらいです。そのほか、並んでい



る眷族（けんぞく）七、八人は、いずれも異相奇形のくせ者でございます。

## 一一、童子と押し問答

童子は、そろそろと入ってきた人々を底気味の悪い目で、じろじろと見ていたが、やがて目を怒らして、

「貴様らは何者だ」

と、われ鐘のような声を出して、いいました。

人々は、それにちっとも臆した気色もなく、先達（せんだつ）の保昌（やすまさ）、まず、上座に着せば、他の者は皆、後ろに従って、ずらりと居並び、保昌（やすまさ）は落ち着き払って、おもむろに手をついて、

「これは都の山伏でござる。伯耆（ほうき）の国の大山へ始めて詣（もう）でたいと存じたるが」

と、いいもきらないうちに、童子は、さえぎって、

「いやいや、いかに山伏とはいえ、わが住む山は峰たかく、谷深く、里からは遠くして道もないところじゃ。地を走る獣でも、空を飛ぶ鳥でも、いっかな来られるところではないわ。貴様らは人間の分際として、ここに來たのは不思議千万。さあ、どうして來た。さあ、さあ、さあ、有り体（てい）に申せ」

申さねば一呑（ひとの）みにも呑（の）んでしまいそうなけんまくです。頼

光（よりみつ）は進み出て、力のこもった声で、にらみつけながら、

「ご不信の程は、ごもつともなれど、われらが修業の源と申すは、ご承知のごとく、役 小角（えんのしょうかく）、道もない山をわざと踏み分け、あるときは大峰葛城（たいほう かつらぎ）を通り、あるときは深山幽谷（しんざん ゆうこく）を渡り、法（のり）の道には身をすてまするもかえりみません……」

と、まだ、いいもきらないのにひきとって、

「その流れをくんで、大峰（たいほう）かつらぎを通り、思わず、道に踏み迷ったと申されるかハ……たわけたうそもよいかげんにしやれ」

と、いっかな、うけ合う気色も見えません。保昌（やすまさ）は、ここで、やりそこなっては一大事と、なおも心のひもをひきしめて、その言葉をうけとって、今度は下手（したて）に出、

「さてさて、山の人にも似ず、おうたぐり深きお言葉。われら頼りに頼って、この宿にたどりついたるも、前世よりのお約束、不思議な縁と心中にお情けを頼って、立ち寄り申した次第。さりとは余りにお情けのうござります」

というと、童子は、

「貴様は先達（せんだつ）だといったではないか。先達（せんだつ）たるものが、真（まこと）の道には導こうとせず、道に踏み迷うとは、心得申さぬ。何様（なによ）う）、子細がござろう。さあ、四の五のぬかさずと、ぎりぎり申せ」

と、いっかな、きき入れようとしません。保昌（やすまさ）は、  
「さてさて、ご無理なお言葉かな。山川駅路の境を知っている者が先達（せんだつ）と申すのではござりませぬ。行法（ぎょうほう）勤修（ごんしゅ）を積んだ者がすなわち先達（せんだつ）。この山に踏みちがえ、こちらへ迷い込んだのは、昔、天竺（てんじく）の大聖、釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）が雪山に登りたまいし折、寒嵐（かんらん）身を苦しめ、積雪道をかくし、行方を失い、惘然（もうぜん）として座せられしとき、一人の童子あらわれ、痛わしのお姿かなと、その行方を指南したのと異なるところはござりませぬ」

と、心をこめ、言葉をきわめて申しますと、  
「なるほど、もっともなことをぬかすわ。それなら、それは、よしとして、貴様らは釈氏の弟子なら、なぜ、鬢髪（びんぱつ）を剃らない。法衣（ころも）を着ない。あまつさえ、刀剣を横たえている。異体の知らぬその形相は何とも言いまぎらかせおおせまえ」

と、急所をついてまいりました。頼光（よりみつ）は、保昌（やすまさ）に、めくばせして、ここはわしが引きうけて言い開こうと、思って、いいもあえず、  
「異なることを仰せなさる。さきにも申せし、役 小角（えんのしょうかく）は優婆塞（うばそく）と申し、その身は大和国葛上郡茅原村（やまとのくに かつかみごおり かやはらむら）の加藤と申す者の三男でござる。三歳の折、父に

別れ、七歳になるまで、母に、はぐくみ、育てられ、長ずるに及んで至教（しきょう）の志（こころざし）あつく、仏道修業の思いは、ねんごろでござりました。ところ五色のウサギに従って葛城山（かつらぎやま）の頂（いただき）に上がり、藤の衣に身を隠し、松の緑に命をつなぎ、勤め学ぶこと三十年、ついに一生不犯（いっしょうふぼん）の聖（ひじり）となられ申した」

と、申してくると、童子は、まだるっこく思って、

「よせ、やかましいわい。今、俺はそんな説法をきいているんじゃねえわ。異体の知れぬ、貴様らの姿が何のよりどころか、ききてえのだ。しゃべるなら、そいつをしゃべれ」

頼光（よりみつ）は心の中で、何をぬかすか、この酒吞童子（しゅてんどうじ）め、と思いましたが、さあらぬ体（てい）で、

「まあまあ、しばらくおききください。そのよりどころを申しているのです。深山（みやま）の中に、ただ一頭の烏帽子（えぼし）を着していましたが、それさえ、雨風に破れうせてしまったので、大童子（おおわらんべ）になって修業いたしましたる故、その流れをくむ、われわれは優婆塞（うばそく）となり、かくは頭には五智の宝冠を頂き、十二因縁の袷（ひだ）をすえ、九会曼荼羅（くえまだら）の鈴懸けに胎蔵（たいぞう）黒色の脚巾（きゃはん）をはき、降魔の利剣を横たえ、外には憤怒の相は現るといえども、内心は忍辱（にんにく）

の心を宗（むね）といたしております」

と、申しました。すると、童子は、さすがに打ちうなずいて、

「それじゃ、心は面（つら）ほどでねえというわけかい」

と、今度は無造作に、こう放り出すようにいいました。

## 一二、酒宴（さかもり）

頼光（よりみつ）は、すかさず、ひと膝、進み出て、

「修業のためと、かかる山深く迷い入りましたが、寒国（かんこく）のいわれ  
にゃ、見あげれば、青葉がくれの遅桜（おそざくら）が今をさかりと咲きほこ  
り、絵にも見ぬ、絶景に一行は酔いたる心地になりました。幸い、都より用意  
いたしてまいった酒がございまするにより、同じく花の下で飲みたいと深山木  
（みやまぎ）の桜の花にひかれひかれて道ふみ迷って、はからずもここに来た  
り、童子殿にお目にかかることができました」

と、まことしやかに申しますと、童子は酒ときいて、

「なんとな、貴様らは酒を持参いたしているのか」

と、さも、飲みたそうに、膝をのり出して、いいます。

「いかにも、長途（ながみち）の旅のうさを晴らすは、ただ酒にしくはなしと、

この笈（おい）の中には酒と肴（さかな）を蓄え、持ってまいりました。一樹

の影、一河の流れをくむも他生（たしょう）の縁とか申しますれば、こよいは一夜の宿をかしたまわれ、酒宴（さかもり）して久々にて旅の疲れも忘れ申さん。帰命頂礼（きみようちょうらい）」

と、念珠（ねんくい）をつまぐり、申されました。そこへ、一行の面々は、笈（おい）をひきよせ、中より、さまざまの佳肴珍味（かこうちんみ）を取り出して、座中に並べおきました。童子は、それを見ると、喉から手が出るようにほしくなり、喜びの気色で、

「さては子細ない山伏であったか。俺はもと越後の国のものであったが、わけがあって、この山に住んで、姿は夜叉（やしゃ）のようであるが、心はさらに昔を忘れちゃいねえ。酒は大好物だ。遠慮はしねえ」

と、急に態度が変わりました。頼光（よりみつ）は得たりと進み、  
「まず、それがし、お毒味をつかまつろう」

と、一杯ほしまして、保昌（やすまさ）にわたしました。保昌（やすまさ）は、これをうけて、一のみにのみほし、にっこりとして、

「いかにもよい味。胸がスーといたしまする。さあ」

と、今度はその杯（さかずき）を童子に渡しました。童子はもう喉がぴくぴくしていたところです。熊の腕のような毛だらけの左手をぬっと出して、その杯（さかずき）を受け取りました。

「うむ、甘露、甘露、もう一杯」

と、一飲みに飲みほして、出しました。保昌（やすまさ）は、

「さ、どうぞ。お口にめして、なによりでございます」

「このうまさは言葉には尽くされぬわい。客僧たち、これは一体、何という酒だ」

保昌（やすまさ）は、

「神変鬼毒酒（しんぺんきどくしゅ）、いやさ、神変気楽酒（しんぺんきらくしゅ）と申しまする」

と、こともなげに、いいますと、

「なに、神変気楽（しんぺんきらく）とは、いかにも面白いぞ。さ、ものども、ごちそうになれ」

と、眷族（けんぞく）にわたす。眷族（けんぞく）の面々は、これまた、喉から一本の手では足りないで両手を出すほど待ち遠しがっていたところですから大喜び。保昌（やすまさ）らは代わる代わる立って童子をはじめ、眷族（けんぞく）どもに、

「さあ、さしましょう。さあ、ほしてください」

と、あっせんします。眷族（けんぞく）らは頭をふり、舌うちして、

「こんな、うめえ酒は、飲んだこたあねえ。寿命がのびべえ」

と、喜ぶことは限りなく、さしうけ、さしうけ、飲むこと、飲むこと、十杯ばかりも干しました。眷族（けんぞく）どもは、お酒のちそうになって、すっかり、機嫌がよくなり、さっきの態度と打ってかわって、

「こんどは、おれがさすべえ」

と、立って、頼光（よりみつ）はじめ、六人についでまわりました。童子はやがて、

「何か肴（さかな）はねえか」

と、いえば、眷族（けんぞく）は、よろよろしながら出ていったかと思うと、鹿と猿の手足を引き抜いて、まだ血がたらたらたっているのを持ってきました。頼光（よりみつ）はこれを見て、

「うむそれ、うむそれ」

と、いいましたので、童子は、肉片二、三寸きって、頼光（よりみつ）にさししました。頼光（よりみつ）は、

「さてさて、うまい肉じゃ。深山（みやま）の猿の足は、また別じゃ」

と、ほめて、舌打ちして、しゃぶっています。童子は、つくづく、これを見て、さては実の山伏ではないか、これはてっきりだまされたかと胸に思ったので、面（つら）の色が、さっと変わりました。そして、

「あいや、坊主、それや、鹿の肉だぞ」



と、念を押しました。頼光（よりみつ）は、さあらぬ体（てい）で、  
「鹿の肉だろうが、人の肉だろうが、うまいものは、うまうござる。いま一塊  
（ひとかけ）二塊（ふたかけ）のごちそうに相成（あいな）り申そうか」

と、いいますと、童子は、  
「さては坊主、肉食の戒は？ 何としたか」

と、少々、気になってきたと見えて、つつこんできました。頼光（よりみつ）  
は心得たりと出まかせに、

「根本行（こんぽんぎょう）の戒と申すは、人の心を破らぬことなら、たとえ  
いかなるものなりとも、施されるなら食します。また、われわれのこの生肉  
といえども、飢えたる衆生にはまるまると施します」

と、申しますと、保昌（やすまさ）は引きとって、  
「昔はご承知でもござりましょうが、鳩に替え、自身の肉を切って、タカにあ  
たえた人がございます。また、薩埵王子（さつすいおうじ）は、かしこくも、  
荒れたる虎に身を施しております」

と、いえば、頼光（らいこう）、後を引きとり、  
「そのうえ、法華経（ほけきょう）には国城妻子（こくじょうさいし）、頭目髓  
腦（ずもくずいのう）、身肉手足（しんにくしゅそく）、不捨身命（ふしゃしん  
めい）と説いてございます。われわれの肉身をたった今、お肴（さかな）にめ

さるればとて恐れとはさらに存じませぬ。そのうえ、浄肉（じょうにく）と申しまするは、仏弟子修行のために五穀なき地に至りまして、まさに餓死よりほかになしという場合に及びますれば、この仏身をば今生にて取りはずすよりほか、ありませぬ。かくては未来永劫（みらいえいごう）浮かぶ世なきにより、鹿、猿、魚鱗（ぎよりん）の類までも、食して仏身を資（たす）けついで、地の大乘の法を成就いたします。と、仏祖は尊くも説いてござります。南無帰命頂礼（なむきみようちょうらい）」

と、さあらぬ体（てい）に合掌いたしました。童子、つくづく、打ちうなずいて、

「ハハ……わかった、わかった。くだらぬ理屈は抜きにしろ。それ飲め、それ飲め」

と、またも大杯（たいはい）をひきよせて、なみなみとつがせ、たてつづけに飲みました。一行は座を立て、女どもと、且（か）つまい且（か）つ、おどりました。眷族（けんぞく）らは、

「ハハ……」

と、手をうって、うけに入っています。前に並べられた飯汁（めしじる）、お菜、鹿、猿の肉など、さまざま取りまぜて山のように出ていたのが、たちまちに平らげられますと、すぐあとから、すぐあとから、と追加いたしました。童

子や眷族（けんぞく）ばらは、かきよせ、かきよせ、食いも食ったり、百年も食わず飲まずの鬼のように、

「それ食え、それつけ」

と、もう底抜けさわぎで平らげました。六人の人々は、またそれに交じって差し受け、引きつけ、飲む程に、杯（さかずき）の数も知らず、並み居る者どもにも、たまわって、順逆も選ばず、のみました。かくて、また、おどる、うたう、大饗（たいきょう）食い果てましたので、

「さらばその杯（さかずき）、先達（せんだつ）頂戴つかまつろう」

と、童子に近づいて、前の大杯（おおさかずき）を取って傾け、また童子の前へ置きました。童子は、

「いや、今日ほど、きつう、よっぱらったこたあねえぞ」

と、いいながら、のみほして、季武（すえたけ）にさします。季武（すえたけ）は、のみほして、また、童子にさす。それより、入れかわり、立ちかわり、すすめたり、すすめられたり、夜もしんしんと更けゆくまで飲みつづけました。

そのうちに童子は奥へも入り得ないで、その座に酔い倒れて、前後も知らず、高いびき、そのほかの眷族（けんぞく）どもも皆、ばたりばたりと酔い伏して、ぐーぐーぐーぐー、鼻ちようちんを二つも三つも出して寝入りました。

### 一三、鬼退治

人々は、すわや今こそと思いましたが、末座に一人、始めから酒も飲まず、肉も食わず、座中に目を配り、人々の様子を見ている、くせ者がいました。それが、

「奥の一間に床を敷いておいたから、皆々お休みなさい」

と、いって、一行をそこへ案内して、ふすまをピシヤリとしめて出ていってしまいました。人々は顔を見合わせて、これまでうまくやってきて、今になって、かのくせ者に見とがめられて時刻をうつすは残念と、とつおいつ、考えましたが、よい考えも思い浮かびません。そこは知謀すぐれた頼光（よりみつ）です、中から何くわぬ体（てい）で、

「誰か、おいでになりませんか。あまり酔って苦しゅうござるから、甚だ恐縮ですが、水を一杯、いただきたいものでござるが」

と、いいますと、件（くだん）のくせ者が、まだ寝もしないで、童子の枕元に宿直（とのい）の体（てい）でいましたのが、

「ちょっと待ちなさい」

と、いってやがに器に水を入れて持ってきたところを、頼光（よりみつ）は屹（じ）っと目くばせしたので、公時（きんとき）は、つと寄せて、引き組みました。この間に人々は童子の寝屋へと忍び入り、大刀をぬき、枕元に立ち寄

れば、童子はカッと目を見ひらき、立ちあがろうとした。けれども、膝が震うて起きることができません。頼光（よりみつ）は、やにわに飛びのって、

「いかにや、酒吞童子（しゅてんどうじ）、われは源 頼光（みなもとのよりみつ）である。王命を背き、国民を悩ました罪をただしに勅命を被って、ただ今まいった。覚悟をいたせ」

と、腰の刀を抜きはなつて、胸もとへ、ひと突きとばかりにあてました。童子は、山の崩れるな大声で、

「さても口惜しや、己ばらを、宵のほどにも引きさいて食わんものと楽しみにしておったものを」

と、わめくところを、頼光（よりみつ）は持つ手開いて、

「えいー」

と、ばかりにお打ちになると、首はきれて、天井へー、二回、飛び上がり、飛び上がりしました。けれど、とうとう、そこどころがりました。眷族（けんぞく）どもは、この物音に驚いて立ち上がろうとしたけれども、これも神変（しんぺん）を失って、身をちぢめて、にげ出してしまうおうといたしましたが、うまくいきません。

「すわ、柱！」

と、柱にとりついて登ろうとしましたけれども、さらに力がございません。

ただ大声で、わめき叫ぶばかりであります。

「そこのくな」

「何を逃がす！」

と、公時（きんとき）、綱（つな）、保昌（やすまさ）、季武（すえたけ）、貞光（さだみつ）は、頼光（よりみつ）の下知のもとに、追いかけて、追いつめ、刺し殺し、斬り殺しました。そのうちに、渡辺 綱（わたなべのつな）と鬼と組んだところが、鬼の力が勝ったと見え、綱（つな）をおさえて、すんでのところに、のどを食いつかれようとしていました。そこへ、保昌（やすまさ）、かけつけ、打って落としました。かくて、眷族（けんぞく）八人、雑人（ぞうにん）二十人も残らず討ち取りました。

「まず、一休み」

と、休んでいますと、そこへ、案内してきた上臈（じょうろう）は、うれし、よろこんで、飛ぶように走りこみました。

「誰かと存じますれば、頼光（よりみつ）様、あなた様はこの世の仏、命の親」

と、手を合わせて拝みました。頼光（よりみつ）は、

「これ、女子（おなご）。わざわざ、山坂こして、ここへ参ったのは、深い子細があつてのたくらみ。それも今は全く達し申した」

と、いかにも爽やかに、喜びの色を顔にあらわして申しました。保昌（やす

まさ)は、なお、女臈(じょうろう)に、

「これや女子(おなご)。まだ、そちのように苦しめられている人々がいるであろう」

と、いうと、女臈(じょうろう)は手をついて、

「はい、あちらの石室(いしむろ)に十四、五人、こちらの石室(いしむろ)に十七、八人、さてはお向かいの石室(いしむろ)にも確か」

頼光(よりみつ)は、それをきいて、驚き、

「さては、そのように生きながら石室(いしむろ)に押し入れて」

女臈(じょうろう)は涙ながら、

「はい。今日二人、明日三人と引き出されては、舞えの踊れのと、むごい仕打ち。あげくのはてには打ちたおして手込めにし、はずかしいおこないをして、それがすめば、手をもぎ、足を切って、ところきらわず食べてしまいまする」

頼光(よりみつ)は今更ながら、残酷な話に驚きましたが、

「それでは一時(いちじ)も早く、そこを案内してくだされい」

と、女臈(じょうろう)の後をついていきました。見ると、大石を畳んだ、いかげわしい岩屋です。頼光(よりみつ)は公時(きんとき)に、

「その大石をどけてみよ」

と、いいますと、公時(きんとき)は、

「えい」

と、ゆりうごかして、そばの谷の方へ転ばしました。岩屋の中の人々は、すね、鬼どもが来た、と、ぶるぶるとふるえて、奥の方へひっこんで、岩にしがみついて泣き出しました。その哀れさときは、きいてられません。頼光（よりみつ）は、やさしく、のぞきこんで、

「鬼にとられた人々、都から向かいに参ったぞ。われは源朝臣頼光（みなもとのあそんよりみつ）と申す者じゃ」

と、声をかけました。すると、人々は夢かとばかりになりを静めましたが、よもやと思って信じないと見え、出てくる様子がございませぬ。頼光（よりみつ）は心の中に、さてはわれを信じないと見える、かわいそうに、また、だまして、食いにきたものと思っているのじゃ、と思いましたので、部屋の中へ入ろうとしますと、その姿をちらりと見て、

「ああ、うれしや。誠の頼光（よりみつ）様でございましたか」

「ああ、それでは、あなた様が都から」

「また、どうして、このような恐ろしいところへおいでになりました」

と、そろそろ、そろそろ、出てまいります。私（わたくし）は都の上臈（じょうろう）であります。わらわは田舎の下臈（げろう）です。私（わたくし）は都のなにがしの子であります。私（わたくし）は摂津（せっつ）の国、難波



（なんば）の者。私（わたくし）は丹後（たんご）の者でございます、と、  
いって、

「私（わたくし）をもお助けくださいまし」

と、口々に青ざめた顔をして申しました。その哀れな様子ときたら、見るに  
忍びません。それもそのはず、目の前で引き裂き、ねじ殺すのを見せつけられ、  
今にも食われようかと籠（かご）の中の鳥のよう、水にせまった魚の泡に息づ  
くごとく思いましたが、この救いにきた人々を見て、地獄の罪人が、地藏菩薩  
（じぞうぼさつ）にとりつくのも、かくやと思いやられました。頼光（よりみ  
つ）は喜びの色を面（おもて）にあらわして、やさしく、

「皆々、安心なされ。これより、故郷（ふるさと）へ、お送り申す」

と、いって、人々をぞろぞろと連れて麓（ふもと）に下りました。下には諸  
卒（しょそつ）が雲のようにお迎えに出ました。

#### 一四、頼光（よりみつ）の凱旋（がいせん）

京都御所では公卿（くげ）の方々初め、市中いっぱい、  
「頼光（よりみつ）が大江山（おおえやま）の酒吞童子（しゅてんどうじ）の  
首をとって帰るとよう。どんな顔だか、見たいものだ」

と、貴賤（きせん）の別なく、見物人が集まりました。近国は申すに及ばず、

遠境の山々、寺々の稚児法師老若の別なく、男女を選ばず、われもわれもと来ています。東寺（とうじ）、四塚（よつづか）、朱雀大宮（すじゃく おおみや）などの辻々（つじつじ）には、人の肩をそばだて、左右を顧みることもできず、車は止まって、通れません。

「おそろしい人出だ。これじゃ、人倒れができべえ。けが人も出るぞ」

と、評判していました。そのうちに一番先頭がやってきました。

「それきた」

と、せのびしてみると、小具足（こぐそく）をつけた足軽が二百人ばかり、二列にならんでいました。次には思い思いに鎧（よろい）を着けた武者が百騎ばかり来ました。そのあとに酒吞（しゅてん）の首を矛先に貫いて、六人の中間（ちゅうげん）で差し上げています。

「あれ、あの首を！」

と、見物の男女は、朝から、おし合いへし合って、首を伸ばして待ちもうけていましたのに引き替え、一目（ひとめ）見て、二目（ふため）と見えず、うつむいてしまいました。あんまり、ものすごい顔なので見ていられないのです。それから、しばらく、騎馬の兵がつづく、いよいよ大将、頼光（よりみつ）が来られました。たくましい乗り換え馬を三匹に、金銀の馬具を飾りさせて六人の舎人（とねり）に引かせ、大將軍は紺地（こんじ）の錦の鎧（よろい）、直

垂（したたれ）に紫下濃（むらさきこま）の御着衣（おんちゃくぎ）を着け、鬼丸の霊剣に虎の皮の尻鞆（しりざや）、かげタカの羽と鵠（くぐい）の羽と矧（は）ぎ交ぜた征矢（そや）、筈高（はずだか）に負（せお）って、塗籠（ぬりかご）の弓の真ん中を握りしめて、さびつ毛の馬の太く、たくましい金覆輪（きんぷくりん）の鞍（くら）を置いて、馬のまわりには武装した歩兵百余人、静まりかえって、打ちかこんでいました。御嫡子（おんちゃくし）頼国（よりくに）は赤地の錦の鎧（よろい）、直垂（したたれ）に緋緘（ひおどし）の鎧（よろい）を着け、黒栗毛の駿馬（しゅんめ）にのって、ひときわ、すぐれて、立ちいでられました。その次には渡辺（わたなべ）、坂田（さかた）、碓井（うすい）、卜部（うらべ）の四天王の面々が思い思いのいでたちでついてきます。

「ああ、立派だ」

「なんという行列だ」

「さすがは源氏の大將だ」

と、見物人は大將軍よりはじめて、おのおのの器量、骨柄、いずれ優劣のないのを見て、感心いたしました。

「それにしても、このたびのはたらきは希代の誉れだ。こんな珍しい、猛将、勇士と、同じ時代に生まれ合わせたのは幸いだ」

と、喜び合わないものはありません。かくて、酒吞（しゅてん）の首は六条

油少路（ろくじょう あぶらしょうじ）から、東へ通って、河原に出して、検非違使（けびいし）の手に渡し、鉄の串に貫いて、さらしました。

一方、頼光（よりみつ）は、直ちに参内（さんだい）いたしますと、三公九卿（さんこう くげ）、皆、出て、

「ご苦勞でありました。おつつがなくて、何よりでありました」

と、口々に、その武徳を祝い、左馬頭頼光朝臣（さまのかみよりみつあそん）は肥後守（ひごのかみ）に昇任せられ、保昌（やすまさ）は丹後守（たんののかみ）に、四天王もそれぞれ恩賞に預かって、天皇からは、あつきおほめの言葉がかかりました。

#### ◎引用文献

『少年 源頼光と四天王（大江山鬼退治）』大久保 竜 著／大同館書店

（＊注）引用文は現代仮名遣い等に改めてあります。